



児童福祉研究 第3号

いっしょに子育て



学校法人

和泉短期大学

目次

contents



特集 子育てへのまなざし

-
- 1** 子どもと運動遊び
副学長 大下聖治 3
- 2** 里親の子育てに学ぶ
教授 櫻井奈津子 13
- 3** 今、子どもが豊かに育つ環境を考える
北イタリアのレッジョ・エミリア市の保育に
インスパイアされて
准教授 久保小枝子 21

Part
2

豊かな保育のために

4

身近な環境から広がる保育
ドングリ虫の正体は？

助教 渡部美佳 29

5

子どもの発達をとらえた保育
えが描くということから考える

助教 星 早織 35

6

コラム いずみのほitori
子どもから教わる／待ってみる

准教授 児童福祉研究室室長 平沼晶子 41



Part 1

特 集

子育てへのまなざし



子どもと運動遊び

副学長
大下聖治
Seiji Oshita

「子どもと運動遊び」

幼児期に獲得する刺激、体験は、子どもたちの様々な発達に重要な関わりを持ちます。子どもたちの遊びの環境が変化していく中で、幼少期における身体活動の質と量が、その後の運動習慣、体力・運動能力に影響を及ぼす要因ともなっています。また、身体の機能発達、社会性の発達に大きく影響を及ぼすものです。

文部科学省は、現代の子どもを取り巻く社会状況から、運動・遊びの機会が失われてきていることに危機感を覚え、「幼児期運動指針」を策定し、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全体の中に確保していくことの必要性を説いています。具体的には、幼児期に獲得しておきたい基本的な動きとして、①立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなどの「体のバランスをとる動き」、②歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなどの「体を移動する動き」、③持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」を挙げています。通常、これらは、遊びや生活体験を通じて獲得されていくものでしたが、その機会や体験できる環境が失われつつあるのが現状です。皆さんのお住まいの地域に、子どもたちが自由に、安全に、創造的・主体的に身体を思いっきり動かせる環境はどれくらいあるのでしょうか。1つの遊び、身体

活動から獲得できる動きや経験は計り知れません。

走り回る遊び

「鬼ごっこ」を例に考えてみましょう。「鬼ごっこ」は原則として、逃げる、追いかけるといった単純なルールで進められます。どのように逃げるか、どのように捕まえるか、鬼役、逃げ役の動きを観察しながら瞬時に判断し、様々な動きによって展開されていきます。発展型として、その場に安全地帯と呼ばれる区域を設置したり、鬼の人数を増やしたりした場合、今度は戦略的な思考が必要となってきます。安全地帯をいかに有効に活用するか、仮に鬼役が3人に増えた場合、逃げ役が処理する情報も格段に増えていきます。単純な追いかっこよりも運動量は減るかも知れませんが、その代わり戦略的思考を必要とした遊びに変わっていき、年齢が上がるほど、そのような遊びが好まれ、より高度なコミュニケーションをとりながら展開されていくことになります。

遊具を使った遊び

「ブランコ遊び」や「滑り台遊び」はどうでしょうか。ブランコは原則として座板に座って前後に揺らしながら遊ぶ遊具です。初めは、保護者や保育者に揺らしてもらいながら「揺れる」という感覚を楽しむことになるでしょう。しかし、徐々に自ら身体を操作し効率よく座板を前後に揺らすことを

覚えていくでしょうし、より大きく揺らすことを楽しんでいくかもしれません。中には、「立ち漕ぎ」というスタイルで、より大きく揺らすことを楽しむようになるでしょう。「座り漕ぎ」「立ち漕ぎ」だけでは飽き足らず、前に飛び出して地面に着地するといった遊びに発展させていく子どもも出てくるでしょう。

滑り台も、お尻で滑り降りてくるのが基本ですが、頭を下に向けてお腹で滑り降りてきたり、滑り面を下から駆け上がってきたりといった遊び方も見られるようになります。普段の生活の中では体験できない動き、感覚、ワクワク、ドキドキ感が遊びの中には含まれているのです。



子育て支援プログラム「はっぴい」での運動遊びの様子

本学では、原則として月1回の予定で子育て支援プログラム「はっぴい」が開催されています。そこでは、様々なテーマに沿って学生スタッフ中心のプログラムが展開されています。過去には、「運動遊び」に特化したプログラムも展開されており、その際には筆者も関わっておりました。

この「はっぴい」での運動遊びプログラムの中で、意図的に造った環境がありました。それは、普段の生活環境の中では体験することが難しいと思われる環境を意図したものです。台やマット等を積み上げ、高さ2mほどの丘を造りました。一番高いところまでは、なだらかな斜面になっており、這いつくばりながら何とか丘の頂点に辿り着く子ども、動物歩きのように頂点を目指す子ども、立ち上がってバランスを取りながら頂点を目指す子ども等、今の自分が出来得る最善の方法を選択して皆、頂点を目指します。



「はっぴい」での運動遊び―頂点を目指す―

そしてこの遊びは、そこで終わりではなく、そこから飛び降りるというところまで進みます。着地点には大きなセーフティーマットが設置されていますし、学生スタッフが何人も丘の周りを囲んで子どもたちの安全を見守っています。

丘の頂点から降りてくる方法は、子どもたちのその時の自由意思に任せます。せっかく丘の上まで辿り着いたけれど、下を見たら急に怖くなって、やっとの思いで登って来たルートを引き返してしまう子どももいました。中には、引き返しはしなくても、どうやって降りて良いのか、固まってしまう子どももいます。2mの高さから降りるという遊びや経験をしている子どもは多くありません。



「はっぴい」での運動遊び―頂点から降りる―

降りることもそうですが、登って来る時も、様々な身体の使い方、力を使って登ってきています。その1回の体験が、身体の操作性に対して貴重な体験になるかも知れません。降りるときも、いよいよ覚悟を決めて滑り台のようにお尻を滑らしながら降りてくる子どももいれば、学生スタッフに手を差し伸べてもらい、「エイッ」とばかりに飛び降りる子どももいます。空中に飛び出して降りた子どもも、初めはセーフティーマットの上に立つことが出来ません。着地点にお尻を着いてしまったり、両手を着いて前に転がりそうになったりもします。学生スタッフに対しては、手は差し伸べて良いけれど、降り方については子どもの好きなようにさせるようにと指導しておりました。

学生スタッフたちは、筆者の授業受講者で、運動遊びにおける安全対策と直接的援助技術（助ける方法）について学んでおりました。子どもの中には、高いところから飛び降りようとするとき、頭が前傾し空中に飛び出してしまう子どもがいます。その場合、ある程度の高さがあれば前方に1回転して落ちてきたり、高さが足りない場合だと背中や首からマットの上に落ちてきたりすることがあり大変に危険です。子どもには回転しようとする意図はありません。ただ、高いところから飛び降りるという経験（遊び）が無いことと、下を覗き込んだ状態から空中に出てしまうことが原因だと思われます。着地は必ず自分の足裏で自分の身体を支える、前に転倒した場合は、自分の掌で自分の上体を支えるといった、遊びや体験を通じて身につくはずの身体の操作性が身についてい

ない子どもも見受けられます（実は成人にも見受けられます。子どもの頃の運動遊びの体験が少ないことが原因と考えられています）。学生スタッフには、そのような動きの前兆について説明しており、また、実際に前傾で飛び出してしまった場合の直接的援助技術（助ける方法）についても指導していたので、安心して子どもたちの動きを観察しておりました。

毎回見られることなのですが、丘の頂点まで登って、急に怖くなってしまう子ども、恐怖と闘いながら何とか飛び降りた子ども、更には1回飛び降りたらもう懲り懲りだと、他の遊びに移っていくのかと思いきや、また並び直して何度も何度も飛び降りる遊びを繰り返す子どもが多くいます。落ちても痛くなかったこと、また、空中に飛び出す感覚（空間認識）にワクワク感を感じたことがこの遊びに興味を持たせたのでしょう。そして面白いことに、子どもたちは飛び降りることを繰り返すうちに、着地が上手くなっていくのです。しっかりと自分の足で着地をすることを自然と身につけていきます。また、前傾姿勢をとっていた子どもも、いつの間にかしっかりと自分の足で着地できる飛び方を行っていました。このことは、遊びを通じて自然に理にかなった身体操作性が身についていったと見るべきでしょう。

危険回避能力の獲得

今まで述べてきた中で、筆者が最も重要視していること

は、如何に「危険回避能力を獲得していくか」です。幼児期運動指針にある幼児期に獲得されるべき動きはすべて、危険回避に繋がる動きの獲得であると考えています。自分の身を守るための様々な身体の方法を、身体を使った遊びを通じて獲得していくことが大切なこととなります。「運動・スポーツが好きだ、得意だ」といったことも、自己肯定感や文部科学省の期待する「生涯にわたって健康を維持し、積極的に様々な活動に取り組み、豊かな人生を送るための基盤づくり」に繋がっていきますが、それは2次的な効果と捉えています。

獲得されるべき動きは、自分の身に迫る危険から自分の身を守るための動きの基本となります。その動きを自然に獲得していくために運動遊びが最も有効なのですが、子どもたちが安全に、自由に、思いっきり手足を伸ばして、心の底から楽しめ、大きな声を張り上げ、また、ワクワク・ドキドキしながら身体を使った遊びが行える環境はどれほどあるでしょうか？

子どもたちが自然発生的に、その時に動きたいように動くという環境は少なく、「運動遊びの場」として意図的に造られた環境の中での活動になってしまうことは否めません。それでも出来得る限り、子どもたちの自由な発想で自由な活動が行える環境を構築する努力をしていかなければなりません。そしてそれは、家庭や保育者、地域社会の役割でもあると言えるでしょう。

副学長

大下聖治

日本体育大学大学院体育学研究科体育学専攻修了

専門分野 スポーツ方法学、コーチ学、幼児体育、身体表現

担当科目 保育内容の総合的指導法「身体表現」、体育理論・
体育実技

経歴 日本体育大学 助手

関東学院大学、洗足学園短期大学、神奈川大学、
桜美林大学等で兼任講師

和泉短期大学児童福祉学科教授・副学長

現在に至る

※日本体育大学体育館を開放して行われていた健康
体育教室（幼児～小学生）の運営・指導に18年
間携わる

所属学会 日本体育学会

日本運動スポーツ科学学会

日本体力医学会

日本保育学会

日本コーチング学会

社会的 旧厚生省「健康運動実践指導者」資格講習会
活動等 評価委員

日本エアロビックフィットネス協会

「健康運動実践指導者」資格講習会評価委員

NHK教育テレビ「テレビスポーツ教室（体操）」
コーチ

座間市子ども・子育て会議 会長

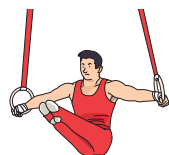
社会福祉法人相模原市社会福祉協議会

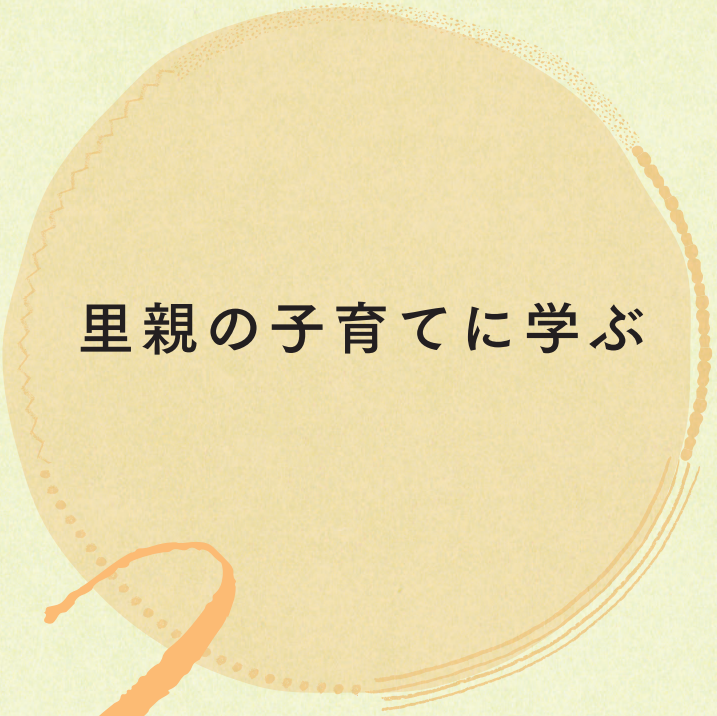
苦情解決第三者委員

全国保育士養成協議会 理事

全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 理事

学校法人和泉短期大学評議員





里親の子育てに学ぶ

教授

櫻井奈津子

Natsuko Sakurai

あ

る日の午後、混んだバスの中で乳児のぐずる声が聞こえてきました。他の乗客の影に隠れてその子の姿をとらえることはできませんでしたが、抑えた声であやすお母さんの声と反比例するように、ぐずり声が大きくなり、車内は一種の緊張感——「早く静かにさせろ」というような、聞こえることのない声——に包まれていくようでした。その時です。「眠いのかな」と年配の方の声が聞こえてきました。お母さんが何か答えているようでした。「眠いよね」と、その声は優しく語りかけ、張りつめていた車内の空気は一変し、乳児のぐずり声も止まったのでした。おそらく、幼子を抱えて混んだバスに乗らなければならず、緊張していたお母さんの不安や焦りが子どもにも伝わっていたのでしょうし、閉塞的な車内での息苦しさもあったのでしょう。「眠いのかな」の一言は母子の不安や緊張を和らげ、その和やかさが車内に伝わっていくようでした。言葉の理解ができない小さな子どもでも、自分に向けられる視線や周りの空気をしっかり受け止めています。温かなまなざしが向けられることで、状況が大きく変わることがあるのです。

少子化・核家族化が進んだ社会の中では、自分の子育てが終わると子どもに触れ合う機会が少なくなります。子ども関係の仕事でもなければ、子どもの声を身近に聞くことはほとんどありません。そうした環境にあって、子どもの声をうるさいと感じ、子どもの存在を疎ましく思う人がいるのは、仕方ないことかもしれませんが、やりきれない思いにもなります。「うるさい」と思えば子どもは邪魔な存在になり、「眠い

のかな」と語りかければ可愛い存在になれるのに。

現代は労働人口の大半が「雇用者」となり、自宅から出勤し仕事をしています。「となりのトトロ」で描かれていたような、農作業の傍らで子どもの様子を視界に入れて過ごす営みは、特に都市部ではほとんど見られません。同じ地域に住んでいても、子どもの顔と名前が一致する交流が少なくなっているのです。もし、何か良からぬことをしている子どもを見ても、見てみぬふりをする、批判的なまなざしを向けて立ち去る、そんな光景もよくあることです。こうした社会環境の中で、子どもの育ちに対する親の責任ばかりが、人々の意識の中で大きくなっていっているように感じられます。たしかに、子どもの育ちに対する責任は、まずは親にあります。ですが、親だけの責任と言い切れるのでしょうか。

「子どもの権利条約」では、子どもの養育の一義的責任は親にあるとしながらも、親がその責任を果たすことが出来るように支援するのは、国の責任であるとしています（第18条）。また、「児童福祉法」では子どもが健やかに育つよう努めることを「全て国民」に求め、国や地方公共団体が子どもの保護者とともに子どもの育成への責任をもつと規定しています（第2条）。

私は、児童養護施設での在職中、里親を支援する業務に携わっていました。里親と



は、都道府県知事の認定を受け、保護が必要な子どもをあずかり養育する人をいいます。子どもは、乳幼児から高校生まで幅広い年齢層の子どもで、養育期間は数日間のごく短期から、子どもの自立までの長期間とさまざまです。

あずけられる子どもの中には、環境の変化や里親を警戒し不安でいっぱいの子、それ以前の大人との関係で傷つけられ、容易に人を信頼できない子、年齢相応の生活経験が未熟な子どももいます。そうした子どもを家庭に受け入れ、子どもとの関係を築いていくプロセスでは、日ごろ私達が「当たり前のこと」として無意識に考え行っている物事を、意識化し、丁寧に行い、子どもの状況に合わせて進めていく必要があります。

子どもと里親との関係が安定するまでには、さまざまな「困ったこと」が起きます。「退行現象」「試し行動」と呼ばれる行動で、幼い子どもの場合は、極端な甘えやわがまま、強情、いつまでも泣き止まない、偏食といった言動が現れます。その「困ったこと」が、「甘えがひどくて、ひと時も里親から離れられない」「ご飯を食べず、お菓子ばかり欲しがる」といった、家庭内での対応で落ち着くことであればいいのですが（とはいえ片時も離れず抱っこを求められる状況は心身ともに疲労しますし、極端な偏食に工夫を凝らす里親の苦労は計り知れません）、幼稚園や学校でのトラブルとなると、里親の努力だけで解決することは難しくなります。



3歳でAさん宅に委託したみーちゃん（仮名）は、言葉よりも先に手や足が出てしまう子でした。気に入らないことや腹立たしいことがあると「止めて」と言う前に相手を叩いてしまい、これが3歳とは思えないほどの強い力なのです。みーちゃんには「叩く」までのプロセスがあるのですが、それを表現できず、周りには「いきなり叩く」と映っていました。幼稚園でのお弁当の時間に、突然、箸で友達顔を突こうとし、間一髪先生が止めに入って、大事に至らずに済んだという事件がありました。Aさんが友達に怪我をさせてはいけないと「スプーンを持たせます」と申し出たところ、園長先生は「みーちゃんには怒る理由があったはずですよ。私達も十分に気を付けますので、今まで通り箸を持たせて」とおっしゃって下さったのでした。この時の幼稚園の対応に救われたと、Aさんは話してくれました。幼稚園がAさんとみーちゃんを理解し支えて下さったこと、先生達の姿勢が保護者にも伝わり、次第にみーちゃんの乱暴な言動は落ち着いていきました。小学校でも多少のトラブルはありましたが、幼稚園からの友人や保護者が応援団になってくれたとAさんは言います。

それから何年も経ってその幼稚園を訪ねる機会があり、みーちゃんの話になった時、園長先生は優しく微笑みながら「忘れえぬ子です。私達もあの子から多くを学びました」と感慨深げに話して下さいました。

里親は、親の養育を受けられない子どもをあずかり育てるという社会的機能を果たす地域の資源であると同時に、あず

かる子どもの養育では、児童相談所や児童福祉施設、幼稚園や学校等との連携を保ち、必要に応じて関係機関からの支援を得て養育を行います。里親と子どもが生活する地域からの理解と応援が不可欠なのです。「子どもの養育は親の責任」という意識が強ければ強いほど、応援を受けにくくなり、養育が苦しくなります。

子どもが学校で問題を起こし、対応に苦慮している里親に、「この子の特性に応じた配慮を学校にお願いしましょう」と提案しても、「先生に迷惑をかけることになる」と、必要な相談をためらう方もいらっしゃいました。

「人に迷惑をかけてはいけない」「迷惑をかけない子に育てたい」と、私達は思いますが、本当にそうなのでしょうか。人は、他者と関わり、社会で生きている存在である以上、誰かに何かしらの迷惑をかけずにはいられない存在なのです。どっちみち迷惑をかけてしまうのであれば、せめて「上手な迷惑のかけ方を」と、発想を変える必要はないでしょうか。迷惑だからと遠慮するのではなく、「こうしてほしい」と、最小限の迷惑を提案するのも、一つの方法だと思います。子どもは失敗し、迷惑をかけながら成長する存在であることを、私達（社会全体）が受け入れ、結果（養育の成果）にこだわらない視点が必要なのです。

里

親Bさんのエピソードです。里子のけん君（仮名）は勉強が苦手、中学での定期テストの結果は、100点満点中10点とれるかどうかという状況です。Bさんの成人した実子が、根気強く教えてくれるのです

が、なかなか成績はのびません。ある時、「頑張ったんだよ」と、Bさんが嬉しそうにテストの結果を報告してくれました。得点は相変わらずの10点台で、何を頑張ったのだろうと思っていると、「答え書いてるでしょ。けんね、点を取りたいって思ったんですよ」と。以前のけん君の解答は白紙に近いものばかりでしたが、この時はすべての解答欄に答えを書いていたのです。プロセスに目を向けることの大切さを教えてくれるエピソードでした。

日本では、社会的な保護が必要な子どものうち、里親に委託される子どもが2割と、その割合が欧米諸国に比べて極端に低く、里親委託の推進が大きな課題です。国は「抱え込まない子育て」をキーワードに、里親支援を進めようとしています。冒頭のバス車内での出来事のように、「どうしたの」「お手伝いできることはある」というまなざしが「抱え込まない子育て」につながっていくのではないのでしょうか。子育てしやすい社会は、特定の機関や行政だけで作るものではなく、私達一人一人のまなざし（意識）によるところが大きいと思うのです。

私の授業では、市内里親会の協力で里親体験談を聴く授業があります。里親の話を聴いた学生が、子どもやその家族に温かなまなざしを向けることの大切さを学んでほしいと願っています。



児童福祉学科 教授

櫻井奈津子

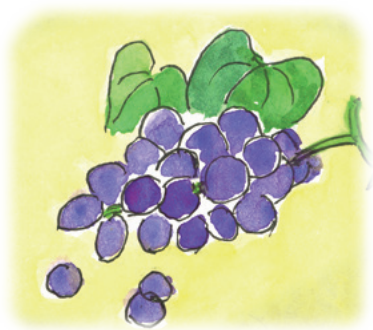
明治学院大学大学院

社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了
(社会福祉学修士)

専門分野 児童福祉・社会的養護

担当科目 子ども家庭福祉、社会的養護の原理、
社会的養護の内容

経歴 児童養護施設 児童指導員 16年
横浜国際福祉専門学校児童福祉学科
講師を経て現職



K.H.

今、子どもが
豊かに育つ
環境を考える

北イタリアの
レッジョ・エミリア市の
保育にインスパイアされて

准教授
久保小枝子
Saeko Kubo

2年前、この地で行われる乳幼児教育の研修会に参加する機会に恵まれました。そこでは、先進的な乳幼児教育を学ぶと共に、「子どもを中心とした街づくり」の実践を聞くことができました。今回は、その保育の一端をご紹介します。

レッジョ・エミリア市の保育は、1991年、アメリカの週刊誌『News week』誌で「世界で最も優れた教育」と称賛され、先進的な乳幼児教育として世界的に注目を集めるようになりました。そして、今もなお世界中の多くの教育研究者や教師、保育者、芸術家などから熱いまなざしが向けられています。

はじめに、この保育の歴史を少し紐解いてみたいと思います。

時は、第二次世界大戦に遡ります。レッジョ・エミリア市は、大戦中レジスタンス運動が盛んでした。大戦後、住民は復興について話し合いを重ね、建物の修復や再建という物質的なものだけではなく、「市民一人一人の幸せと良い生活の実現」が真の復興であると考えたのです。そこで、親（特に母親の思い）が中心となり、最も根本的な街の再生は乳幼児教育からと、市民による幼児学校の建設が始まりました。「市民一人一人の幸せと良い生活の実現」を目指し、子どもの育ちに良いと考えられる環境を自分たちで考え、つくり続けていこうじゃないかという考えで誕生したのです。



現在では、レッジョ・エミリア市に40程の乳幼児教育施設があり、公立を中心に、私立でも同じ教育方針で乳幼児教育を行っています。

この保育で最も大切にされているのは、子どもへの思いです。全ての子どもの可能性、有能性、力強さを徹底的に信じ、子どもを市民として権利をもつ尊い存在として深い愛情を抱いて育てています。0～2歳児が通う乳児保育所と3～5歳児が通う幼児学校がありますが、乳児保育所でも幼児学校でも園内にいる子どもたちと保育者で保育を展開するのみならず、保護者や地域の人と共に保育に携わっているのです。

子どもたちが園の遊びの中で興味・関心をもったことに保育者やアトリエリスタ（芸術専門の教師）は注目し、共に探求を始めます。話し合ったり、挑戦したりと繰り返すのですが、園内にとどまらず親や地域の人などの力を借りて、子どもたちのもつ感性をさまざまな表現で引き出していきます。



例えば、週に1度幼児学校を街へと移し公園や市立劇場の並木道で保育を行い、展覧会をしたりもします。街全体が子どもたちの保育や活動に関わり、子どもたちの育ちに手を携え、共に楽しんでいるのです。実際に作品を観ますと、子どもたちの創造性やもっている表現力にも驚かされます。どの作品もそれぞれの子どもがもつ感性が表現された大人顔負けの芸術作品に見えます。これは、この市の保育が教育・保育に関係する者の関心を引くばかりか、芸術家からも厚いまなざしが向けられるのも当然のように思います。そして何よりも、この市に住む人たちが、自分たちの街や保育・教育、文化に誇りと情熱をもち、自然体で楽しんでいる姿が印象的でした。

もう1つ興味深いのは、1996年に設立された創造的リサイクルセンター（REMIDA）の存在です。企業から出た廃棄物など素材を集め、展示し、提供しています。レミダに足を踏み入れて驚くのがその多種多様な素材です。様々な種類の紙、毛糸、布、ボタン、革、木片、プラスチック、工具など保管総量170tです。この施設の目的は、コミュニケーション力と創造性のための育成と助長です。子どもたちの興味・関心に沿って乳幼児教育施設、小学校以上の教育機関、高齢者や障がい者の施設も利用可能ですし、一般市民も利用可能なのです。



本は、2015年度から「子ども・子育て支援新制度」が開始しました。この制度は、すべての世代が協力し、子どもと子育て世代を社会全体が支えていくような仕組みを形成することを目的にしています。国の大きな枠組みはあるものの、各自治体で特徴を出していくことができます。私たちの住む地域の子どもたちにどのように育ってほしいか、保育や教育をどうするかを考えることに繋がっているのだと思います。レッジョ・エミリア市の保育から学んだ「子どもの興味・関心」を出発点とし、地域と共にあるユニークな実践を考え、相模原市でも様々な人が協働し、未来を生きる子どもたちのために豊かな保育環境を考え、提供できるよう力と知恵を合わせることが大切なのではないかと思いました。

児童福祉学科 准教授

久保小枝子

東洋英和女学院大学大学院

人間科学研究科人間科学専攻 修士課程修了

専門分野 保育学・幼児教育学

担当科目 保育内容「言葉」、保育内容の総合的指導法
「言葉」、キリスト教保育、
インターナショナルフィールド、実習指導等
「子どもの声に耳を傾けること」と
「目に見えない心の育ちを大切にしよう」と
学生たちに伝えています。

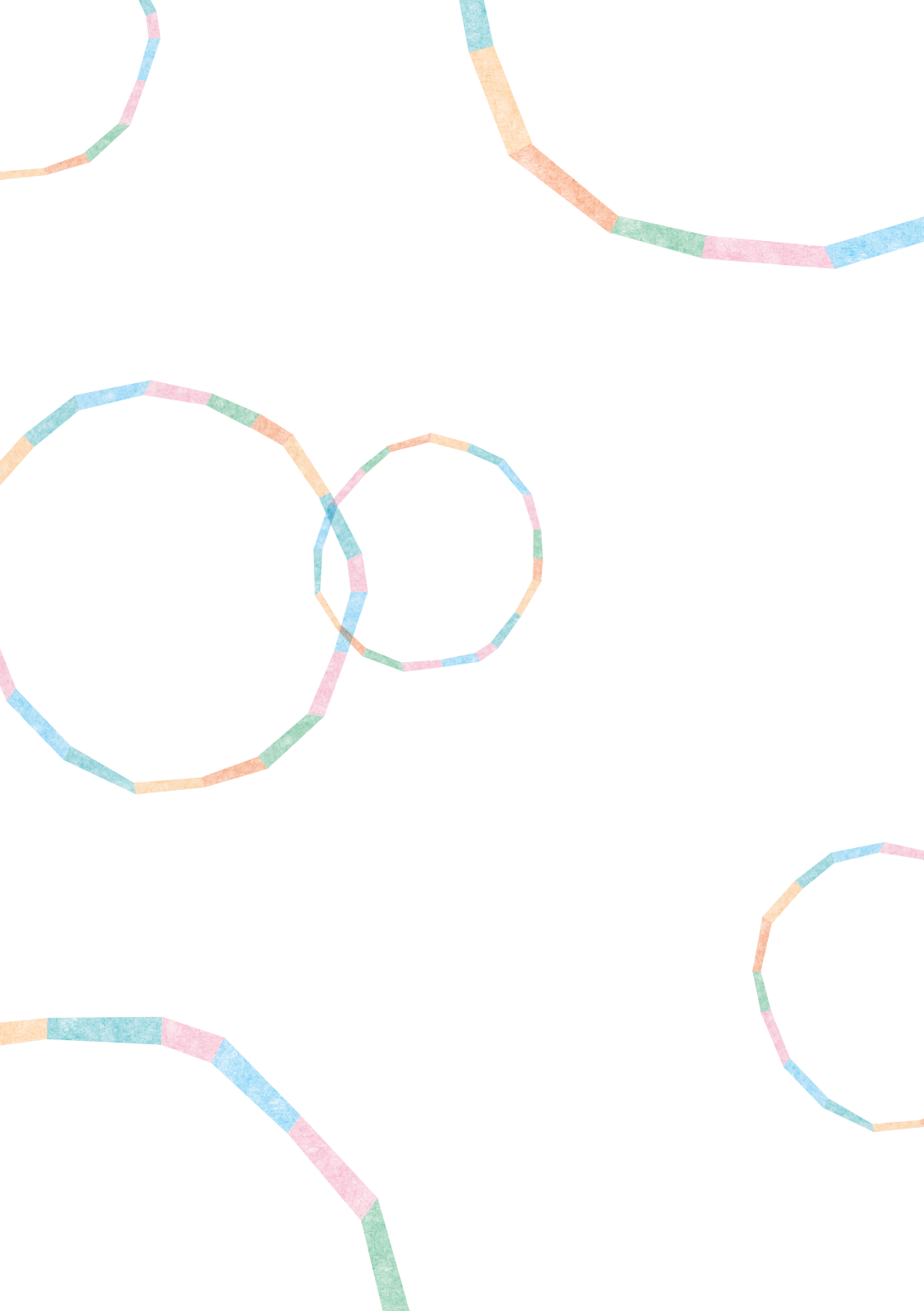
経歴 臼井学園ひなぎく幼稚園教諭8年

青山学院幼稚園教諭18年

和泉短期大学 児童福祉学科 専任講師
を経て現職

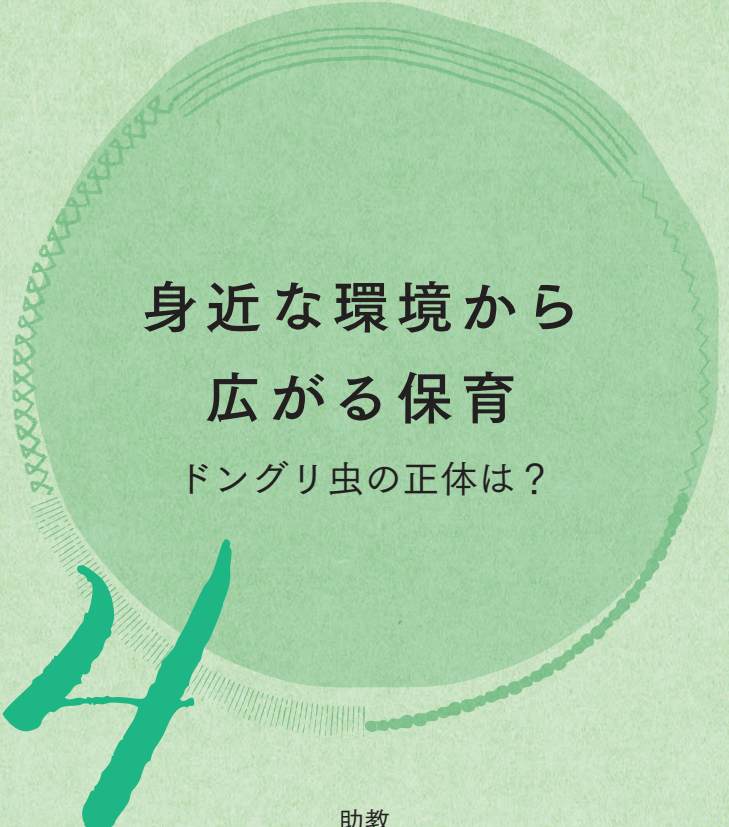
現在 和泉短期大学子育て支援プログラム「はっぴい」
「すまいい」のリーダーとして地域の子育て支
援に関わっています。子どもの感性が豊かに育つ
環境はどういうものか考え、その向上を願い活動
に携わっています。





Part 2

豊かな保育のために



身近な環境から 広がる保育

ドングリ虫の正体は？

助教
渡部美佳
Mika Watanabe

子

どもが遊ぶ身近な環境の自然は、昔と比較すると激減したと言われます。そうしたなか、2017年に告示された幼稚園教育要領の中では、幼児期における自然のもつ意味の大きさがあらためて取り上げられています。子どもたちは、自然からたくさんを感じ取り、楽しみながら学びを深めていきます。例えば、自然の中でも生き物との関わりについて見てみると、両手に収まらないほどたくさんセミの抜け殻を集めてきたり、ポケットいっぱいにダンゴムシを捕まえてきたりなど、いたるところで子どもが夢中になる姿が見受けられます。

生き物と関わることによって、子どもは対象となるものの色・形・手触り、場合によっては匂い・味などを知っていきます。これは小学校以降の教科などで働かせる「見方・考え方」の基盤となります。また、生き物の飼育や栽培などの活動を通して、少しずつ命を大切に作る心が育まれていきます。さらに生き物を捕まえたり追いかけたりするために、自分自身の運動能力を高めることも必要になります。このように子どもが生き物と関わることは、その心身の発達にも重要な役割を果たしていると言っても過言ではないでしょう。

しかしながら、子どもに関わる大人（保護者・保育者など）の中には生き物、中でも特に「虫」を苦手とする方が少なくありません。「嫌い」あるいは「苦手」という気持ちは不思議と子どもに伝わるものです。

そこで私の授業では、たとえ苦手であっても「虫は嫌い！」と最初から距離を置いてしまうのではなく、「それらの正体は何なのか？」まずは関心を持ってみようと伝えています。そのために虫の不思議さや面白さを伝える実践的な取り組みを行い、将来子どもの好奇心に応えたり手助けしたりできる保育者の養成を目指しています。



回はそこから、お散歩の際にも見つけることができる身近な虫の不思議をひとつご紹介したいと思います。

子どもがお散歩に行くと必ずと言って良いほど拾い集めるドングリ。その拾ってきたドングリを大事に宝箱にしまっていて、忘れた頃に開けてみると……「白いイモムシ（幼虫）がたくさんいる！」ということはありませんでしたか？このような体験から、イモムシが出てこないようにドングリを冷凍したり煮沸したりするといった対策をしているかもしれません。



ドングリから出てきた「ゾウムシ」の幼虫

さて、少し違った視点から考えてみましょう。このイモムシ、大きく（成虫に）なったら何になるのでしょうか？正解は「ゾウムシ」という奇妙な形をした虫の仲間の一種になります。写真のように、ゾウムシの成虫の体にはその名の通り象の鼻のようなつくりがあります。このつくりの正体は鼻ではなく、その先端に噛むための口が付いています。



「ゾウムシ」の成虫

ゾウムシの成虫は、ドングリがまだ緑色の小さい時期に外側から目に見えないほどの小さな穴を開け、卵を産み付けます。その卵はドングリの中で幼虫になり、実を食べて大きくなります。つまりゾウムシの幼虫は餌に囲まれ、ぬくぬくと成長していくのです。ドングリの実が熟すと、幼虫はドングリとともに地面に落ちます。そして土の中でさなぎになるために内側から大きな穴を開け、外の世界に出てきます。せっかく「綺麗なドングリを見つけた！」と思って持ち帰っても、いつの間にか穴が開いているということがありませんでしたか？これは、見つけた時にはドングリの中にいる幼虫がまだ外に出てくる前だったということです。

それでは、ドングリから出てきたイモムシの飼育に挑戦してみましょう。拾ってきたドングリをそのまま、またはドングリから出てきた白いイモムシを、固く押し付けた土がたっぷり入った飼育ケースに入れます。するとイモムシは、土の中にもぐっていきます。ドングリの実をお腹いっぱい食べたので、餌を入れる必要はありません。あとは土が乾燥しないように時々霧吹きで水を与える以外はそっとして屋外に置き、次の年の初夏頃に成虫が出てくるまで待ちましょう。成虫が出てきたらそのまま飼育をしたり観察をしたり、ドングリを拾った森に返してあげたりなどなど、様々な保育を展開することができるでしょう。

ソ ウムシという虫をひとつ知っただけで、保育の展開が膨らみそうな気がしませんか？このようなことが日常のあらゆる身近な環境に潜んでいると思います。つまり、子どもに関わる大人自身が環境に対して不思議を感じたり知ったりすることが、今までにない充実した保育へと導いてくれることでしょう。さあ、身近な環境を見つめなおしてみませんか？



児童福祉学科 助教

渡部美佳

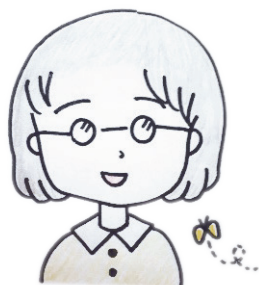
東京農業大学大学院農学研究科農学専攻

博士前期課程修了（修士（農学））

博士（学術）（東京家政大学）

担当科目 保育内容「環境」・保育内容の総合的指導法「環境」

経歴 玉川大学助手・東京家政大学助教を経て現職



N.I.



子どもの発達を とらえた保育

えが
描くということから考える

助教
星 早織
Saori Hoshi

家

で過ごす時間が増え、お子さんと一緒にお絵描きをして過ごしたという方もいらっしゃるのではないでしょうか。保育の中でもお絵描き、つまり描画表現には子どもの心の動きがよく表れており、子ども一人ひとりを理解するためにも大切な活動です。

1年次前期科目、乳児保育Ⅰという授業で、『1歳児クラスで七夕を題材に制作を行います。八つ切り（B4サイズより少し大きめ）の画用紙に織姫と彦星の絵が描いてあり、子ども達には着物の部分の塗り絵をしてもらうことになりました。この活動をするのが決まった時、あなたは保育者としてどのようなことを考えますか』というワークを行いました。子どもが大好きな学生達ですので、1歳児の子ども達がわくわく楽しい活動になるようにと「色画用紙をハートや星などに型抜きして子ども達が好きに貼れるようにする」や、「顔や髪型も自分で描けるようにしたら良いのでは」など、さまざまなことを思いついている様子でした。

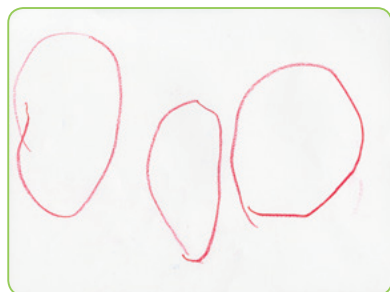
子どもにとって描くということはどのようなことなのでしょう。子どもがクレヨンに興味を持つのはちょうどスプーンなどを手に持って操作することに興味を持ち始める頃です。クレヨンに触り指先に色が付くことに驚いたりする子もいれば、偶然描けた点や線に気づき、「これはなんだろう」と興味を持つ子もいるでしょう。描くことは、このような偶然との出会いから始まります。

お座りが安定し道具を使って遊ぶようになってきたら紙とクレヨンを用意してみましょう。この頃の子どもは肩を支点

とした大きな動きをしています。クレヨンを紙に振り下ろしてできた点や、腕を左右に往復させて線状の跡がつくことをみつけ楽しさや喜びを感じている様子がうかがえます。1歳後半頃になると、肩と肘の2点が支点となり丸みを帯びた線や、縦方向にも線を描くことを楽しむ姿がみられるようになります（写真①）。腕の動きをコントロールできるようになると2歳頃にはぐるぐると渦巻き状の伸びやかな円を描くようになり、次第に描いた円の始点と終点が重なり閉じた円が現れるようになります（写真②）。自分の意志で描いた線が元あった景色を一変させたことに気づき、満足して大人に共感を求める姿がみられるでしょう。また描いたものを見て「パパ・ママ」、「リンゴ」などイメージしたことを伝えるようになっていきます。このように描きながら考える、ということを繰り返しながら、紙いっぱいに絵が展開していきます。

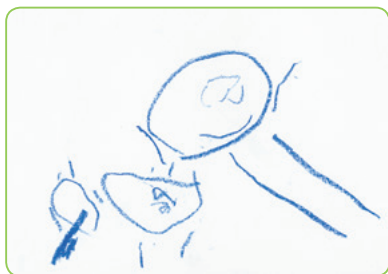


写真①



写真②

3歳くらいでは大きな円の中にさらに小さな円を描き、顔らしきものを表現するようになります。また顔から直接手足を描き、頭足人と呼ばれるものを書くこともあるでしょう（写真



写真③

③）。この頃の子どもは生活の中で家族や友だち、保育者など身近な人を意識するようになると言われています。ですので、描いたものに動きや行為のイメージが伴うようになり、表現する世界を更に大きく広げていくのです。

ここまで授業で説明した後、学生達に先ほど取り組んだ七夕の制作について自分の答えを見直してもらい、どのようなことに気づいたか書いてもらいました。すると「始めは1歳児の子どもでもできる簡単な活動だと思っていたが、そうではなく子どもに無理をさせてしまう活動なのではないかと思った」や、「子どもは突然できるようになるのではなく、これができるようになったから次にこれができる、といった流れがあることが分かった」「子どもはもっと大人がお世話をしないといけないと思っていたが、子ども自身が自ら成長していく力を持っているということに気づき、興味深かった」等、描くことを通して保育者が子どもの発達を理解することの大切さやその意味に気づいたようでした。

保育現場で働いていた頃、保護者の方から子どもの発達についてご相談を受けることが多くありました。今は育児に関する情報もスマートフォンなどですぐに調べられますし、興味のあるような情報が次から次に表示され目に入ってくる時代ですので色々なことをご心配されるのも当然だと思います。そうした時に私は少し前の子どもの姿を保護者の方と共に丁寧に振り返るようにしていました。子どものことで気になることがあった時、どうしてもそこにばかり目が行き、子どもの姿を今という点でしか捉えられなくなってしまうことがあります。ですが少し前の子どもの姿を振り返り、思い出してみるだけでもたくさんの成長した部分に気づくことができるのです。

安

全で豊かな保育を考えると、子どもの発達の道筋と目安を知っておくことは重要です。文中でも発達の道筋を分かりやすく示すために年齢を挙げていますがそれはあくまでも目安に過ぎません。そしてその目安にも大きな幅が設けられており、その年齢までにできないといけないチェックポイントでは無いのです。子どもは発達可能性を秘めた存在であると言われています。特に乳児期の子どもは環境に適応しようと自分の姿をも変えて日々成長していきます。これからも子どもの成長を信じ、温かいまなざしで見守ることの大切さについて保護者の方、そして学生達と共に考えて参りたいと思います。



H.H.

児童福祉学科 助教

星 早織

明星大学大学院教育学研究科教育学専攻

博士前期課程修了（教育学）

幼稚園教諭、保育士、社会福祉士

担当科目 乳児保育Ⅰ・Ⅱ、子どもの健康と安全、実習指導等

経歴 公立保育所保育士を経て現職。

保育現場のリアルや自身の子育て経験を活かし、
現場の声を後輩となる学生達に届けられるよう
日々努めております。





Column

いずみのほとり

子どもから教わる／待ってみる

准教授
児童福祉研究室室長

平沼晶子

Akiko Hiranuma

子どもから教わる

大人になると忘れかけていた大切なことを、子どもの姿から気づかされ、学ぶことがあるように思います。

ここでは2つのエピソードを紹介します。

♪ エピソードⅠ



3歳を過ぎた女の子に、保育者が絵本を読んでいた時のことです。ある場面で主人公が驚いて「失神する」という表現が出てきました。保育者はそのまま読んで聞かせると、女の子は『しっしん』ってなぁに？」と聞いてきました。そこで、保育者は「そうねえ、びっくりして『気を失う』ってことかしら」と応えると、女の子は頭をフル回転させて考え始めました。そして、「きおう……？」「きおうし……？」とつぶやきます。「きをうしなう」をどこで区切ったらよいのか、ありったけの知識に関連づけながら考え、「うし」の部分拾って牛の仲間も連想してみたようでした。保育者は、初めて出会う言葉の意味を知ろうとして懸命に考える女の子の姿に、みずからが育とうとする力を実感したそうです。

このように、子どもは日々出会う事柄に思考をめぐらしています。人間は本来、何かに面白みを感じ、それに取り組む

なかで、自分の可能性を見い出しながらよりよく生きようとする存在といわれます。子どもの「考えずにはいられない」姿には、まさにこのことが映し出されているように思います。もし、私達大人が毎日知らない言葉や出来事との遭遇の連続だったら、さぞかし辟易^{へきえき}してしまうと思いますが、子どもの「知ろう」とする力は本当にスゴイと気づかされます。

♪ エピソード 2



子高齢化が進むなか、幼稚園教育要領等では、子どもが高齢者との交流を通して文化や伝統に触れることの重要性が示されています。一方、厚生労働省は、「高齢者が自分の能力を生かして地域社会に積極的に参加することは、より自分らしく生きがいのある充実した人生を送ることにつながる」との観点から、高齢者ボランティアを地域の人材として活用していくことの大切さを謳っています。

こうした子どもと高齢者をつなぐ活動のひとつに「シニアボランティアによる絵本の読み聞かせ」があります。この取り組みについて、私は学生を引率して幼稚園を見学した時に初めて知りました。子ども達は、外部から来たシニアの方の読み聞かせに、少し緊張しながらも夢中で聞き入り、また、読み聞かせをするシニアは子ども達に生き生きと関わる姿が印象的でした。このシニアの方々の活動についてもっと知りたいと思い、お話を伺った際に語られたエピソードです。



ニアボランティアのKさんが幼稚園に出向いて読み聞かせをしていた時のことです。子どもたちが集中して聞き入っている最中に、「ピ、ピ、ピ……」。こともあろうにKさんの携帯が鳴ってしまいました。いつもは必ず携帯のスイッチをオフにしているのですが、その日は直前に連絡が入り、うっかりオンのままだったのです。Kさんは大慌てでスイッチを切りましたが、申し訳なさで頭の中が真っ白になってしまったそうです。そして、子どもたちに「ごめんなさい、ごめんなさい」とひたすら謝りました。

そのような時、子どもたちからどのような言葉が返ってきたと思いますか？それは「そんなこともあるさ！」でした。Kさんはこの一言に救われるとともに、子どもの口からサッと出た、相手を思いやり勇気づける言葉にハッとさせられたそうです。そして「人として大切なことに気づかせてもらえるこの活動に喜びを感じる」と嬉しそうに語ってくださいました。



待ってみる

日々の子育てでは困ったことや手を焼かされることも多く、決して良いことばかりではありません。「うちの子はちゃんと育っているのだろうか…」「どうしてうちの子はこうなのかしら…」という心配や悩みは、子育てにつきものです。子育ては先が見えないために不安も募ります。

でも、少し視点を変えてみると、もともと子育てとは「自信をもってできるものではない」のではないのでしょうか。なぜなら、自分とは違う人間を育てるのに自信などもてるはずはないからです。ときには、親と子どもは別人格、神様からの預かりものと割り切ったほうが、気持ちが軽くなるかもしれません。

発達のスピードや現れ方は一人ひとり違って、そこに個性があります。また、発達過程は常に上向きの直線状ではなく、^{らせんじょう}行きつ戻りつの螺旋状です。他の子どもと比べることで、自分の子育てを苦しくさせないようにしましょう。また、ときには「待ってみる」ことも大切になります。あるお母さんが次のようにおっしゃいました。「トイレットトレーニングに必死だったあの頃…大騒ぎして大変だったけれど、過ぎてしまうと『いつのまにか』できるようになっていくものだなあと思えます」と。

晴れる日ばかりでなく、雨の日も曇る日もなければ植物は育ちません。子育ても同様で、「待つ時間」が親と子どもを育てるのでしょうか。

児童福祉研究『いっしょに子育て』第3号を手にとって頂き、有り難うございます。2020年は新型コロナウイルス感染症拡大により日常が一変しました。健康や生活面に影響を受けられたすべての方々に、心よりお見舞い申し上げます。和泉短期大学の子育て支援プログラム「はっぴい」「すまいりい」もお休みせざるを得ませんでした。そうした中であっても、子ども達の明るく元気な声が聞こえてくると救われる思いがしました。そして、この子たちのためにも、安全で安心して生活ができる環境を取り戻さなくては、との気持ちが強められました。海外で子育て支援に携わる知人から、「こうした状況だからこそ手を取り合って子育て家庭をいかに支えていくか、新たな課題に挑む時です」との力づよいメッセージが届きました。

和泉短期大学も、地域の皆様との「いっしょに子育て」のあり方を考え直す時と捉え、明るい未来に向けてお役に立てるよう努力してまいります。今後ともご意見やご感想をお寄せ頂けますようお願いするとともに、皆様のご健康をお祈り申し上げます。



K.H.

児童福祉学科 准教授

平沼晶子

白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻博士課程修了
博士（心理学）・臨床心理士・公認心理師

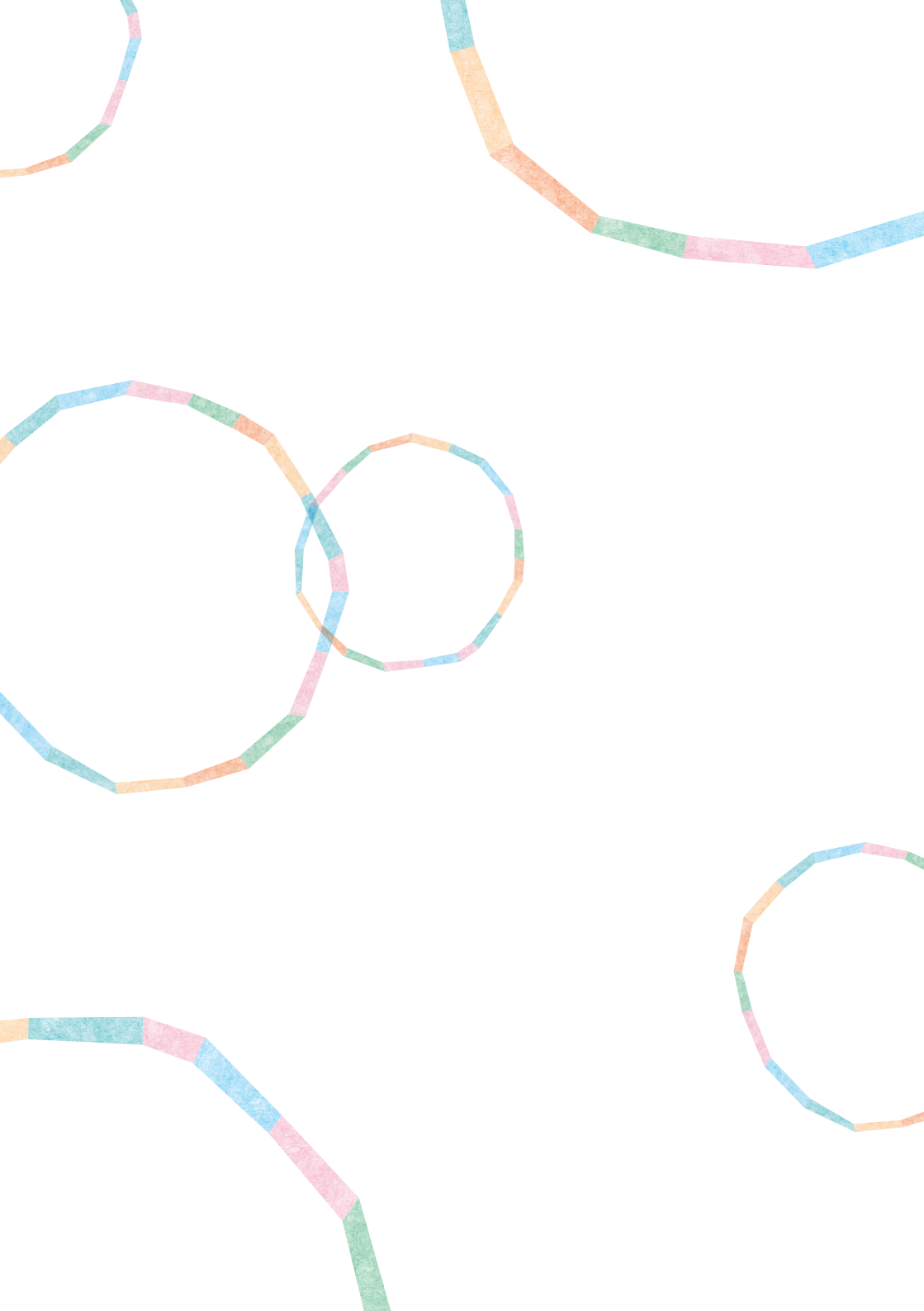
専門分野 発達心理学・臨床心理学

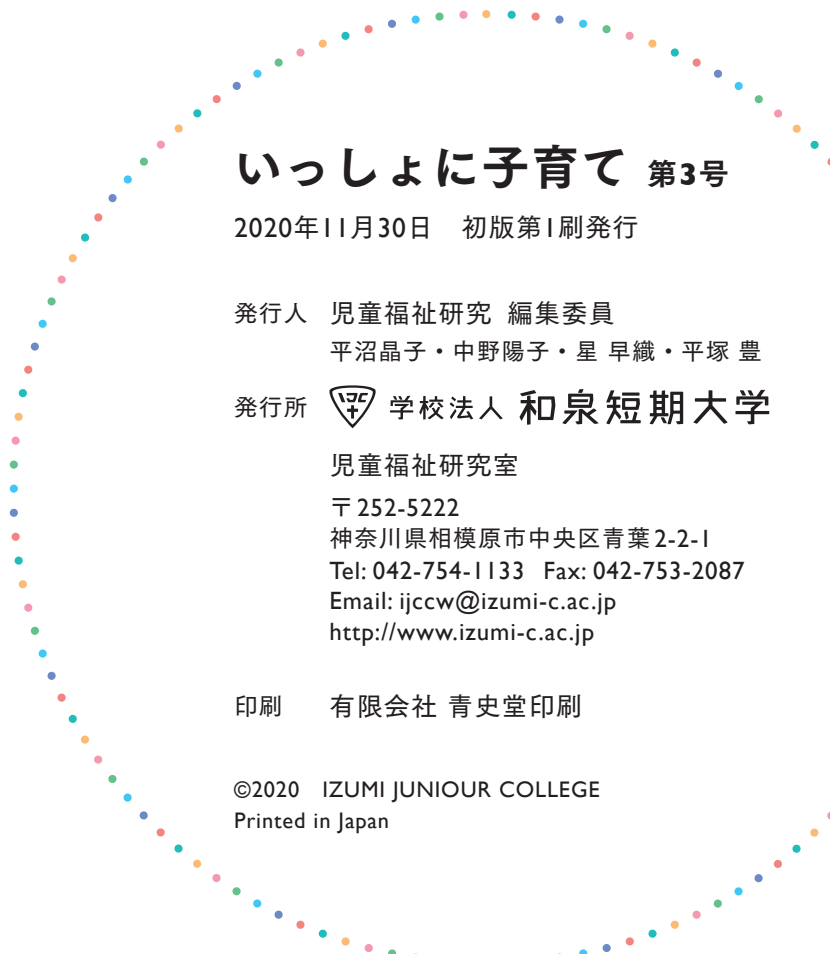
担当科目 子ども理解と保育、子ども家庭支援論、
保育内容（人間関係）等

経歴 心療内科カウンセラー、保健センター乳幼児健診の
心理相談員として勤務
白百合女子大学助教・東京福祉大学専任講師を経て現職



K.H.





いっしょに子育て 第3号

2020年11月30日 初版第1刷発行

発行人 児童福祉研究 編集委員

平沼晶子・中野陽子・星 早織・平塚 豊

発行所  学校法人 和泉短期大学

児童福祉研究室

〒252-5222

神奈川県相模原市中央区青葉2-2-1

Tel: 042-754-1133 Fax: 042-753-2087

Email: ijccw@izumi-c.ac.jp

<http://www.izumi-c.ac.jp>

印刷 有限会社 青史堂印刷

©2020 IZUMI JUNIOUR COLLEGE

Printed in Japan

表紙絵：荒井万梨永（2018年度卒業生）

花言葉：黄色／ガーベラ「親子の愛」

紫／クレマチス「深い思いやり」

裏表紙絵：林田桂子

